

この度、岡崎の生理学研究所で開催された第5回 Motor Control 研究会に参加してまいりました。3年前の第2回研究会の際に、単位時間あたりに得られる情報量の多さに感動し、再参加の機会をうかがっていたところ、今回、別件の日本出張と日程が重なるという幸運に恵まれ、迷わず参加申し込みをしました。被災者に優先的に旅費助成が与えられるなどの配慮もあり、震災からわずか3ヶ月という時期にも関わらず、例年通り多くの参加者が得られ、3日間とも大盛況となりました。

初日は、集まって早々、かの有名な丹治順先生による特別講演という豪華プログラムでした。私も、名著「脳と運動」を蛍光マーカーだらけにしながら繰り返し読んだ、この分野の典型的な学生の一入だったので、大変楽しみにしていました。こういった“大御所の基調講演”でよく観察されるのが、聴衆全員が既に知っている“過去の栄光”がたんと語られ、気づけば大多数が夢の中・・・という現象ですが、本講演では、過去の先生のお仕事の内容に加えて未来への問題提起がなされ、先生の毒舌も程よいスパイスとなり、最初から最後まで刺激に満ち溢れていました。私個人としては、本講演を通して、他人の研究に対して批判的な視点を持つこと、そして自分の設定した問題に対して注意深く実験パラダイムを組むことの大切さについて、改めて考えさせられました。

2～3日目は、4つのシンポジウムと50を超える一般演題発表が行われました。一般演題発表では、各演者による2分間トークの後に、3時間半にわたるポスターセッションが行われました。2分間トークはいわば宣伝タイムで、この時に聞いた研究の概要に興味を持ったら、ポスターセッションでさらにディスカッションをします。このような形式の研究会は日本国内では稀ですが、短時間のうちに最新の運動制御研究の動向を俯瞰できるとともに、今講演を聞いたばかりの研究者と、すぐに突っ込んだディスカッションができる点で、非常に合理的だと思います。2分間という絶妙な長さの時間で演者が次々と交代し、常に新しい刺激が入ってくるので、気持ちがだれることがありません。ポスターの前なら、私のようなシャイな人間でも積極的に質問ができますし、そのまま盛り上がりれば共同研究の可能性まで相談することができます。私自身は演奏家（ピアニスト）の運動制御、心理的ストレスが運動制御に及ぼす影響について研究しているので、指系列運動課題、バイオフィードバック/ニューロフィードバック、fMRI/脳波計測を用いた研究など、自分の興味と重なる演題に印をつけておいて、片っ端からポスターを回りました。その結果、イギリスに帰ってから名刺の整理に苦勞するほど、多くの研究者と貴重な交流をすることができました。

ネットワーキングを主眼においた本研究会では、懇親会も大変充実しています。今回、私はボランティア登録をしていたので、初日の get together party, ボランティアの懇親会, 2日目の懇親会の計3回参加させていただきました。初日の get together party では主に出身研究室の同僚との旧交を温め、ボランティアの飲み会では若者同士、研究者の婚活の話題で盛り上がりました。私はシンポジウム1「非侵襲脳機能計測による運動制御研究の基礎と臨床」

¹ ウェブサイト <https://sites.google.com/site/yoshiemichiko/>

の内容に非常に興味を持ったので、2日目の懇親会では、花川先生や花島先生に積極的に話しかけました。実は私自身、シンポジウムのメインの話題のひとつであった演奏家の局所性ジストニア（focal dystonia または musician's cramp）に罹ってしまい、今もリハビリ中なので、お二人の先生方とジストニアの原因や治療法についてお話でき、大変有意義でした。本研究会は、ウェブサイトでも謳われている通り、若手育成に力を入れているため、私のような学位を取得したばかりの若手研究者でも気軽にシンポジストの先生方に話しかけやすい温かい雰囲気があります。

このように、**Motor Control** 研究会には、研究者同士の交流を促進するためのあらゆる工夫が凝らされています。運動制御関連分野における我が国最高のネットワーキングイベントとして、自信を持ってご参加をお勧めしたいと思います。この体験記を読まれた方、ぜひ次回、岡崎でお会いしましょう！